

# 大学野球部員における競技社会的スキル・部活動適応感・集団効力感・ 集団の動機づけ・試合中のチーム行動の関連性について

松山 恭平 (競技スポーツ学科 スポーツビジネスコース)  
指導教員 山本 達三

キーワード：大学野球，部活動，モチベーションマネジメント

## 1. 緒言

競技スポーツ組織が組織目標を達成するためには，選手のモチベーションマネジメントを上手にコントロールすることが肝要である。河津ら (2012) は，スポーツ組織の集団効力感と試合中のチーム行動が関連していることを指摘し，芹澤ら (2008) は，集団効力感を強める要因として，競技社会的スキルが部活動適応感へ正の影響を与え，部活動適応感が集団効力感へ正の影響を与えることを示している。内田ら (2011) は，集団全体としての動機づけを高めることでチーム行動が高まることも指摘している。

本研究では，それぞれ個別で行われてきた競技社会的スキル，部活動適応感，集団効力感，集団の動機づけ，試合中のチーム行動を統合し，5 要因間の関連性と構造を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

調査対象者は滋賀県 B 大学 100 票，大阪府 O 大学 125 票，京都府 H 大学 44 票の硬式野球部員を対象とし，調査項目は，基本属性，競技社会的スキル尺度，部活動適応感尺度，集団効力感尺度，集団の動機づけ，試合中のチーム行動を用いた。

## 3. 結果

3 大学全体，大学別，学年別，チーム別の 4 パターンの 5 要因間の関連性と構造を検討するために共分散構造分析を行った。3 大学全体では，競技社会的スキル (.83) が部活動適応感 (.92) を媒介し，集団効力感に関連しており，集団効力感 (.52)，集団の動機づけ (.57) から試合中のチーム行動への直接効果が見られたため，芹澤ら (2008)，河津ら (2012) の先行研究を裏づけるモデルとなった。大学別では，全大学において，先行研究を裏づけるモデルとなり，B 大学では集団効力感 (.71)，H 大学では集団の動機づけ (.75) に高い関連性

が見られた。学年別では，3 回生のみ，先行研究を支持するモデルとはならず，5 要因間の一連の関連性が認められなかった。チーム別では，全チームにおいて先行研究を裏づけるモデルとなり，A チームでは集団の動機づけ (.75)，B チームでは集団効力感 (.66) に高い関連性が見られた。

## 4. 考察

共分散構造分析において，3 回生のパス解析以外は，競技社会的スキルが部活動適応感を媒介し，集団効力感に関連していることが示された。また，集団効力感，集団の動機づけが試合中のチーム行動に関連していることを示した。さらに，競技社会的スキルから集団の動機づけ，試合中のチーム行動に直接効果をもたらしているモデルも見られ，先行研究以上の関連性について検証することができたと考える。また，4 パターンでの関連性を検証したことにより，それぞれの特性を把握し，チームマネジメントを実行できる可能性が示唆された。

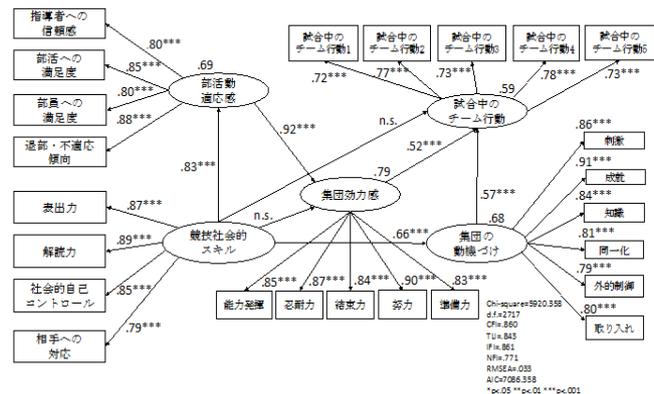


図1 大学野球部員における要因間構造

[参考文献]

河津慶太，杉山佳生，中須賀巧. (2012) スポーツチームにおける集団効力感とチームパフォーマンスの関係の種目間検討. スポーツ心理学研究, Vol. 39(2): 153-167.